

17億のイスラム教徒との共生



内藤 正典 (ないとう まさのり)

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授

1956年、東京生まれ。一橋大学教授を経て2010年から現職。ヨーロッパにおけるムスリム移民研究、現代イスラム地域研究。著書に『イスラームからヨーロッパをみる』、『となりのイスラーム』などがある。

【この講演は、令和3年9月15日に初任行政研修（Cコース）において行われました。】

今日の講義では、イスラム教徒との共生をめぐる問題を扱います。ちょうど1か月前に、アフガニスタンの首都カブールがタリバンによって制圧されました。それから2週間の間、アメリカをはじめ欧米諸国は軍隊の撤退と、協力者であるアフガン人の退避をめぐる大混乱に陥りました。このひと月余りの間に、イスラムというよりはタリバンについての話が非常にメディアを賑わせてきました。こういうときのメディアの扱いは、一つの決まった方向に流されます。流された結果、そのネガティブな部分が、一般のイスラム教徒のところにも跳ね返るということを覚えておいてください。

講義の前提

本日の話の前提を五つ申し上げます。

最初に申し上げておきたいのは、世界の大体4人に1人に近い人口がイスラム教徒だということです。彼らも西欧の世界の価値観と折り合いをつけて生きていくことはできます。実際、そういう人たちがかなりの割合を占めるんですが、ただ、イスラムそのものの根本原理のところに戻ると、西欧近代以降の価値の体系とは、ある意味、全く違うものが表に出てきます。土台が違っていると、その上に法律や制度をつくってきたときに、中身が全く変わってしまう。そのことをまず、頭に置いておいてください。

二つ目は、西欧近代文明もイスラム文明も、共に文明ですから、非常に大きな力を持ちます。文化というのは必ずしも力を持ちません。しかし、文明というのは、こうであるべきだという強い規範性を中に含みますので、

その両者が衝突すると非常に危険です。実際に、もうイスラムと西欧世界との間は危険なレベルに達してしまっています。

三つ目は、先ほど言ったように、4人に1人に近い人口がイスラム教徒なわけですから、その基本的な違い、土台の違いを理解しないままに、イスラム世界で起きている事象を理解しようとする両者の断絶が拡大します。ともすれば、その断絶を力づくで変えさせようとして軍事行動に出てしまうということになりますが、これが成功しないのは、今回のアフガニスタンの例を見てもよく分かることです。

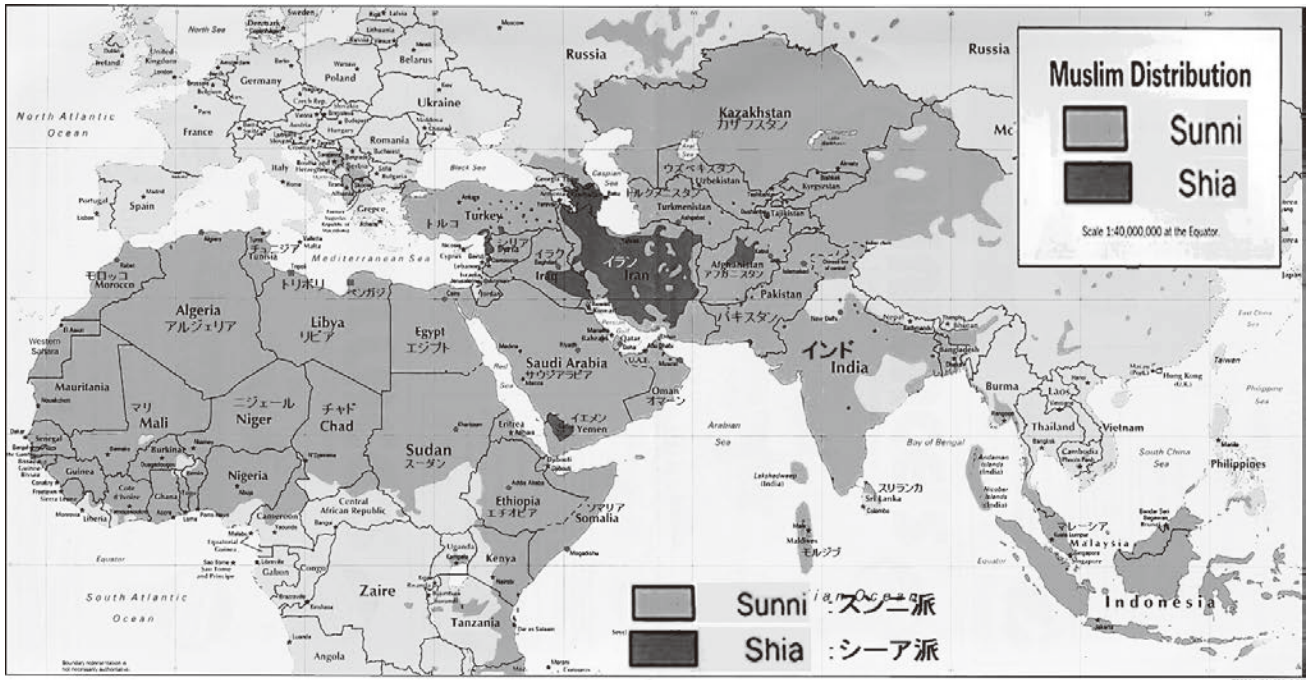
四つ目として、ムスリムではない人間から見たときに、ムスリムとどう付き合うか。それも、排除してしまうのではなくて、共に生きる存在としてどう見ていくかということをお話の前提とします。したがって、今日、私がお話することも、イスラム教徒自身が話す場合は違うことを言う可能性があります。

最後に、イスラム世界は紛争、戦争が非常に多いです。ただ、これがイスラムという宗教に帰する話なのかということも、いやイスラムのせいには決まっていると思いつまむ前に、ちょっと立ち止まっていたいただきたいということを前提にいたします。

イスラム世界の広がり

イスラム世界は、地図で見るとこれだけの広い領域に及んでいます【スライド1】。二つの大きな派があり、薄いアミのほうのスニー派、濃いアミのほうのシーア派です。中国の西が新疆ウイグル自治区です。それか

スライド1 イスラム世界



ら、中央アジアを経て、アフリカの西まで広がります。南のほうもタイ南部、マレーシア、インドネシアなどがイスラム圏に当たります。

ちなみにインドネシアは国家として見た場合、最大のイスラム教徒の人口がいる国です。そしてインドも、通常、ヒンズー教徒や仏教徒の国だと思われましても、やはり1億を超えるイスラム教徒がいます。

インドに西で接しているのはパキスタンで、そのパキスタンの北側にアフガニスタンがある。アフガニスタンの北には、タジキスタンとかウズベキスタンなどかつてのソ連がある。それからトルクメニスタンなど中央アジアの国がある。西はイランに接している。

ぜひ、新たに国家公務員になられた皆さんに心がけていただきたいんですけども、今、高校の段階で地理を履修していない人が多いので、世界で何か起きたときに、空間的に把握できていないことが非常に多いんです。今のメディアの記者たちもそうです。アフガニスタンの記事を書いているけど、アフガニスタンがどこにあるか、現場にいる記者を除くとほとんど正確に理解していないでしょう。

アフガニスタンは、地図を見ていると実にややこしい場所にあるということが分かります。アフガニスタンは19世紀以来、まず、南下しようとしたロシア側と、それからパキスタン、バングラデシュも含めての巨大なブリティッシュインディアを抑えていた大英帝国、この両者の間で奪い合いになります。

19世紀から20世紀にかけて3回、イギリスと戦争をするわけです。結果的に、イギリスはアフガニスタンの支配を諦める。

アフガニスタンが独立をしたのが1919年です。その後、社会主義になったソ連も1979年から1989年まで10年間にわたって、アフガニスタンを支配しようとするけれども、結局、撤退し、撤退した直後にソ連自体が崩壊して冷戦の終わりに至るんですね。

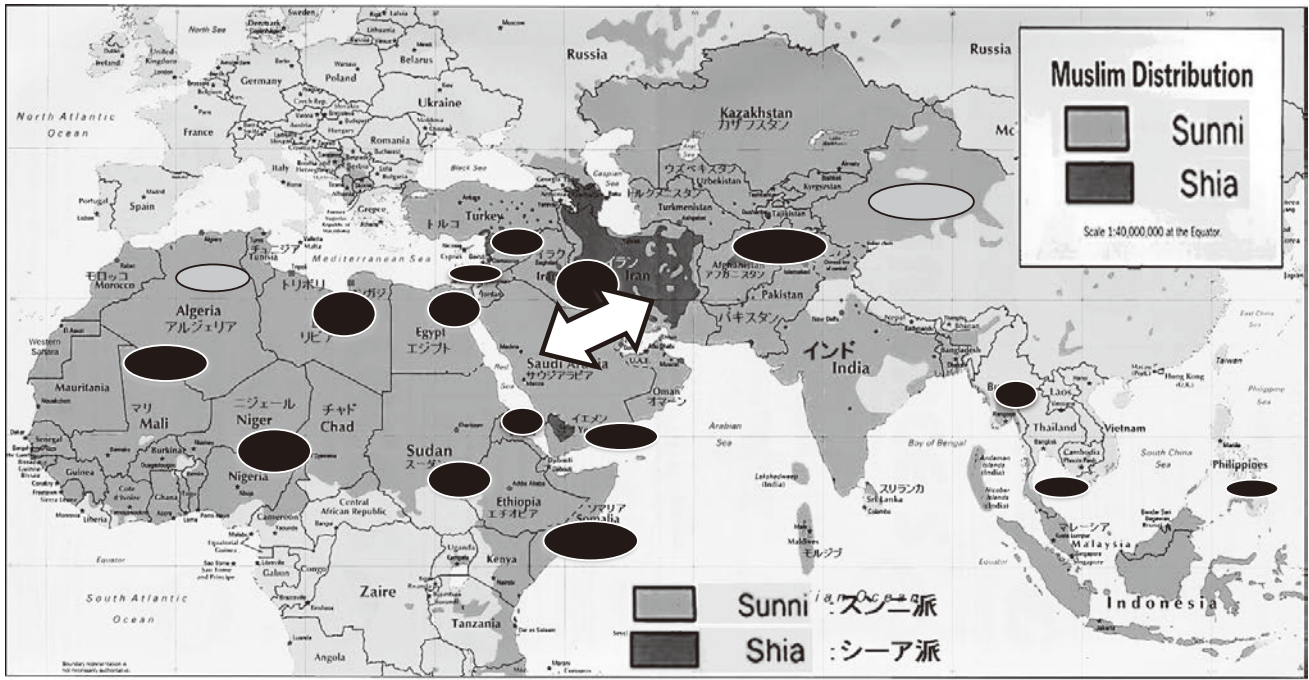
今度は2001年、アメリカでの同時多発テロ事件の後、20年にわたってアフガニスタンをアメリカとNATOの加盟国の軍隊が支配しましたが、これも結局失敗して、今年の8月30日までに撤退した。そういう歴史的な背景を持っています。実は、そこより西の中東の世界も似たり寄ったりの経験を持っています。まず、そういうところだということを少し頭に置いておいてください。

現実に、どれくらい紛争地域があるか【スライド2】。少し薄いアミの楕円のところは正面衝突をしていないだけで、内在的に紛争の要因がかなりあります。

イランとサウジアラビアは、直接戦争はしていませんけれども、シーア派のイランとスンニー派のサウジアラビアの関係は、極めて緊張したものです。特にイエメンという国をめぐる、イラン側が支援するグループと、サウジアラビアとUAEが支援するグループとの間で激しい内戦が続いています。

それから、アジアのほうを見ると、ミャンマー領から

スライド2 中東・イスラム世界の紛争



● イスラム政治勢力による紛争地域

追放されてバングラデシュとの境の地域に逃れているロヒンギャの人たちの大変な難民問題があります。それから、タイはあまりイスラムの問題とは結びつかないかもしれませんが、南部3県の地域は、ずっとタイの政府軍と紛争が続いています。フィリピンでも、現在は少し落ち着いてはいますが、南部のほうはイスラム教徒の武装勢力がいますので、ここでも紛争は続いています。

イスラムはどんな宗教か

さて、本題に入ります。教科書的な説明は避けようと思っているんですが、イスラムがどんな宗教かということだけは根本なのでお話しします。

■唯一絶対の神に全てを委ねる一神教

まず、一神教だということ。しかも、それは絶対者としての神、アッラーです。今でも、日本のメディアでは「アラーの神」と書いているところがありますが、アラーではなく、「アッラー」です。この神に全てを委ねる、あるいは服従すると宣言して、心から信じていれば、その人はイスラム教徒ということになります。

■創始したのはムハンマド

始めたのはムハンマドで、彼は神の使徒と呼ばれます。預言者のうちの一人で、イスラムではムハンマドが至高の預言者であるとされています。

■ムハンマドは「預言者」

ただ、ここで間違えないでいただきたいのは、このムハンマド自体に神としての性格はありません。ただの人間です。当たり前ですが、神性を認めると、神が二人いることになりますので、強くこれを否定します。この点はキリスト教の主流の考え方との大きな違いになります。キリスト教の場合には、神に対してイエスを神の子と位置づけますし、その間に聖霊を置いて三位一体と言いますが、イスラムはムハンマドを神の子扱いは絶対にしません。ただし、神の子ではないですが、神のメッセージを人間に伝えた存在として、ムハンマドに対しては非常に深い敬愛の念を抱いています。つまり、ムハンマドがいてくれたおかげで、自分たちは人間になれた、そういう感覚に近いですね。

ヨーロッパで、イスラムを冒瀆したということで、よくもめています。意外に思われるかもしれませんが、神を冒瀆しても、神の姿が思い浮かぶわけではないので、ばち当たりには違いありませんけれども、大してめめません。ただ、このムハンマドを冒瀆した場合には

激しい怒りをもたらす危険がありますので注意しないと
いけません。

イスラムでは、預言者というのは何人もいます。イス
ラム教より前の一神教、キリスト教でも、イエスは神か
ら福音を授かったという意味で預言者なんですね。同じ
ようにして、ユダヤ教のモーセも律法を授かっているの
で、やはり預言者です。ですからイスラム教徒は、先行
する一神教に対しては、言わば自分たちの先輩である
という意識を持っています。

■7世紀前半に誕生

イスラム教は、7世紀前半、今から1,400年ぐらい前
にできています。日本では普通メッカと言っていますけ
れども、正確にはマッカです。一度、周りの他神教徒と
争ってメッカを退いてメディナに移りますので、その前
後で、神から託されたメッセージの内容が変わってきま
す。その神から託されたダイレクトメッセージを本にし
たものが聖典コーランです。

■聖典クルアーン(コーラン)

キリスト教の場合には、神の福音を伝えた福音書だけ
でも、4人の記述者によって残されたもの、それ以外に
外典といって本物かどうかよく分からないけれども、典
書を伝えたものがあります。ところがイスラムの場合、
1種類しかないんです。でも、最初から定本で1種類し
かなかったかという、恐らくそうではなくて、口頭伝
承で伝えられたものの中で、100年ぐらいかけて、これ
が本物だというものを一本に絞っているんです。絞った
後は、もう一本しかありませんので、現在、世界でコー
ランとして手に入れるものはどれを見ても同じ内容しか
書かれていません。

したがってコーランは、神の言葉そのものになりま
す。先ほど、ムハンマドを侮辱すると非常に怒りをかき
立てると言いましたけれども、このコーランを侮辱した
場合も同じです。

キリスト教の聖書だって冒瀆はしないほうがいいです
けれども、聖書の場合は、あれは神のダイレクトメッ
セージじゃないんですよ。書かれているのは、基本的
にはイエスが生まれてから十字架に磔になるまでの物語
ですが、このコーランはあれをしろとか、これをしちゃ
いけないとか、こうやってお祈りをしろとか、結婚する
ときはこうしろとか、離婚するときはこうしろとか、そ
ういうことが全てダイレクトメッセージの形で書かれて
いるという点で、キリスト教の聖書と大きく違います。

■神と人間は垂直関係

イスラムでは神と人間というのは完全な垂直的な関係
で、人間同士という横の関係は平等になります。した
がって人種差別とか民族差別とかという考え方はありま
せん。ここは非常に重要な点です。ただ、実際に差別が
起きることはもちろんあるんですけども、イスラム自
体の中には、その観念が含まれません。

個人として神と契約を結びますので、存在するのはあ
くまで個人対神の関係だけです。つまり、ある意味イス
ラム教は、他人には関心が無いという特徴があります。
神の代理人と呼べるのはムハンマドだけで、このムハン
マドと契約関係を結ぶことで、イスラム共同体という信
者の共同体が成立する。ただし、もちろん、現実はいろ
んな国に分かれておりますので、かなり観念的な次元の
話ですが、にわかには、この感覚が強まることある。そ
れは、イスラム教徒の住んでいるところに対して何らか
の戦争で、非イスラム教徒が攻撃した場合です。このと
きはどこに住んでいても、イスラム教徒は一つだとい
う意識が急激に強まりますので、注意が必要です。

■人種、民族による格差、社会的身分格差は 認めない

また、人種、民族による格差を認める観念はありませ
ん。だから、社会的身分格差というものもないです。これ
は本当にない。人種や言語の多様性というのはもちろん
分かっているわけで、多様性は認めますが、ただ、それ
だけのことです。今、日本でもSDGsを含めて、多様性
に対して寛容でなければいけないという話がありますけ
れども、これは西欧のほうがもともと多様性に対して不
寛容だったのが、やっぱりそれではいけない、寛容にな
らなければいけないと言っているもので、現状では、欧
米諸国のほうがはるかに不寛容です。

この身分格差の否定というのは、西欧的なヒューマニ
ズムとは全く関係がありません。つまり、神と垂直的な
契約関係を結んでいる人間に上下を認めようがないか
ら、格差が否定されるわけです。

■他の一神教徒を否定しない

先ほども少し触れましたが、キリスト教やユダヤ教と
いうのは先輩の一神教ですから、同じ神の啓示を受けた
人として、否定しません。ただ、先行する一神教は、後
に啓示を誤って伝えたのだと考えています。例えば、キ
リスト教の場合にはイエスに神的な性格を付与したこ
と。それから、ユダヤ教の場合も、選民思想といって、
ユダヤ人が選ばれているという考え方を取りますけれど

も、イスラム教は、これは絶対的に間違いだと言います。

ただ、繰り返しますが、別にキリスト教だから、ユダヤ教だからという理由で敵意はありません。

■過去の一神教の預言者の名を付けるのはごく一般的

イスラム教徒に、マリアムとか、イーサー、ムーサー、スライマー、ダウードという名前の人がごく普通に見られますけれども、マリアムはイエスの母のマリアのことですし、イーサーというのはイエスのことです。ムーサーはモーセ、スライマーはソロモン、ダウードはダビデですから、過去の一神教の預言者の名前をつけるのは、イスラム教徒の場合、ごく一般的なことです。

■論理構造において因果関係を重視しない

何か原因があって、こういう結果になるということ、それは理解するんですけども、因果関係は神の意思であって人間には分からないと考えているところがある。ちょっと難しく言うと、物事の結果が、その事物のうちに原因があるとすると、神の全能性を損なってしまうということです。

ムスリムとはいかなる人間か？

それではムスリムとはどういう人間か。

根本的な定義を言うと、「イスラムする人」のことです。

■イスラームする人がムスリム

アラビア語は、我々が知っているヨーロッパ系の言語と全く違うセム系の言語ですけれども、基本的に3つの子音の組合せが一つの意味を持つんです。SとLとMという3つの子音が組み合わさると服従するという意味になるので、イスラームというのは、「神に服従する」の意味で、そのイスラームする人がムスリムになります。

■イスラームはイスラームする宗教

イスラムというのは、イスラームする宗教ですから、唯一絶対の神との契約に基づいて全面的に従う。あるいは全的に身を預けるという意味になります。ただし、間違えないでくださいね、現実のイスラム教徒が完全に全面的に従っているかということ、それはまた別の話です。

■アッラーの命令の範囲で人生を楽しむ

特にムハンマドが生きていた時代の後半の啓示では、現世での慈悲深い神への感謝が強調されるようになりまして、神はいろいろ言ったけれども、「おまえたちが無理をしているんじゃないかと思って、ここは緩めた」みたいな記述がコーランの中にも出てきます。

禁欲主義はないと覚えてくれても構いません。ただしルールがあるんですよ。そのルールの範囲内で人生を楽しむ。禁欲主義にするという考え方はない。

■来世に対する絶対的信仰

それから、来世というのは絶対的に信じています。死んだ後の世界がある。もちろん来世で楽園つまり天国に行きたい。そのために、現世でできるだけ神の命じたままに動こうとする人たちです。当然のことながら、人間ですから、間違いというか、イスラムでは駄目だと言われていることをやってしまうんですけども、やったら次にいいことをして埋め合わせればいいやと考えているところがあります。イスラム教徒に聞いてもそうは言いませんけれども、私はずっと長いこと、いろんな世界でイスラム教徒の行動様式を見てきて、そう感じています。

■原罪の観念はない

最後に、キリスト教と違って原罪の観念というのがありません。人間が生まれながらに何か罪を背負っているなんてことは全く考えない。人里離れたところでひたすら祈るといった修道生活の観念もありません。今言ったように、人生の罪は善行で埋め合わせて改善しようとするんです。

非常に現実的な例で一つ申し上げますと、イスラムの場合、不倫、姦通というのは神との契約を破ったものとして死刑にするというのが原則なんです。他方、複数の妻を持つことを認めています。4人まで認める。これはしばしば、欧米諸国では、女性の人權を軽んじるものとして非常に強く批判を受けますけれども、イスラム側の理屈はそうじゃないんですね。駄目と言ったって、絶対、不倫というのは起きるし、その結果、子供が生まれることもある。西欧世界の場合は、そうして生まれた子供をかつては私生児として扱っていましたが、日本でも非嫡出子と言って、例えば財産権や遺産の相続権においても不平等な扱いをしましたよね。ようやく今、それは改善されつつあります。

イスラムは、親は罰するけれども、生まれてきた子供に罪はないと考えます。そこは非常に厳格で、1,400年

前からその原則を取っているんです。だから、不倫をするくらいだったら正式に婚姻を認めるという形を取ります。よく第2夫人とか第3夫人という言い方をしますが、夫人の間に序列はありません。ただ、単に妻が複数になるというだけです。現実には、大半は一夫一婦です。

神の法としてのイスラム

ここがイスラムを理解する場合に、ある種、非常に重要なポイントなのですが、イスラムは内面的な信仰だけで成り立たない仕組みになっていて、外形的な法の体系を持っています。

つまり物事の善悪というものをイスラムは5区分で示すわけです。絶対にしなさいと言っていること（絶対善）、やったほうがいいこと（相対善）、どちらでもいいこと（善悪無記）、やらないほうがいいこと（相対悪、嫌われる行為、ただし罰則なし）、それから、絶対禁止（絶対悪・禁忌）。絶対悪は、神との契約を破ることに当たりますから、場合によると罰があります。

姦通の場合には死刑、お酒を飲んだ場合はむち打ちです。これはコーランに遡るので、量刑を人間が変えることはできません。

ただ、現実にはそういう刑罰を科すかという、ほとんど科さないです。なぜ科さないかということも、後で説明します。

こういう倫理の規定を法の体系にしていくのは、合理的に理性的な法解釈に基づきます。このことをイスラム法学といいます。ちなみに、今のアフガニスタンのタリバンは、このイスラム法で国を統治すると宣言しています。

現実には個人が決めること

タリバンみたいに、イスラム法で国を統治するという場合は別ですが、現実には、やるかやらないかを含めて個人が決めることです。世界のレベルで見れば、酒を飲むムスリムなんていくらでもいる。そういう禁止事項を守らない人はいるんです。

もちろん、周りがみんなイスラム教徒のところで大っぴらに酒を飲んで、かつ、酔っ払ったりすると、こいつ何とかしろということになって、むち打ちになることはありますけれども、別に家で飲んでいても誰も何も言いません。それから、現実にはイスラムの法、シャリーア

といいますが、これを国の法律にはしていない国が多いんです。その筆頭がトルコで、トルコは完全に法体系は世俗法ですので、別にお酒を飲んだからといって何か罰せられるようなことはあり得ない。エジプトもそうです。

トルコで見ていると、面白いのは、お酒を飲む場所は決まっています、別に法律で決めているわけじゃないですけども、飲む人が集まる店は飲める。しかし、お酒を出さない店は出しませんので、それは社会的には分離しているんです。

ムスリム自身は、酒がイスラムで禁じられていることは知っています。知っているけど飲んでいてというだけです。ただ、そういうふうには、悪行ってというのは、やってしまうものなんですけれども、自分で天秤にかけて最後に善行を多くしようとする。死ぬ前にそれをやっておかないと、最後の審判で、生前、善行が多かったか、悪行が多かったか神が判断して、天国行きと地獄行きに分けられてしまうので、生きている間にはせいぜい善行を積んでおこうと行動するんです。人によって、物すごく真面目な人もいれば、いいかげんな人もいます。いろんな人がいて、完全にグラデーションになっています。

私は信者ではないのですが、私から見ていると、日頃、悪いことをしているやつに限って、断食するラマダン月になると突然善いことをしたりします。断食しなければならぬので大変な月だろうと我々は思いますけれども、ムスリムは非常に心待ちにする。どうしてかという、イスラムでは、この月に善行を行うと、御褒美が倍加されることになっているんです。日頃悪いことをしている人に限って、この月になると真面目になるという現象が起きるのはそのためです。それで、無理してでも断食しようとしています。

また、これは特にイスラム圏でビジネスをやる日本人に、いろんな機会に申し上げていることですが、例えば現地に駐在して、向こうの人も含めてお酒を飲むことがあります。ただ、飲んだからといって、イスラムを捨てた、あるいは脱宗教化したとは、間違っても思わないことです。彼らは悪いと知っていて飲んでいるだけの話なので、別にお酒を飲んだからイスラムを捨てたということには全くなりません。

例えば、仮に飲み会に誘ってついてくるイスラム教徒がいても、そういう人がある日突然、非常に真面目なイスラム教徒に、ころっと変わることがよくあります。場合によると急進的になることも起きますから、相手の信仰内容についてこちらがジャッジするようなことは絶対に口にしないことが重要です。

実際、コーランの中で、信仰においては強制を禁止している。無理強いをするなということが出ています。イスラムのルールは非常に細かく決められていますけれども、一方では寛容な部分が含まれています。

さらに言えば、イスラムの人間観というのは、人間というのは欲望に弱いということが前提とされています。ただし、絶対禁止の事項を破る行為というのは、一線を越えたものとして、身体に罰を与える、ハッド刑の対象になります。例えば自覚的にこの教えを捨てる、あるいは姦通、飲酒、強盗などがそうです。

ただ、ほとんど執行されません。この刑を執行できるのは、その国が完全なイスラム国家である場合だけです。だから、アフガニスタンについては、タリバンがイスラム国家にするとはっきり言っていますので、この場合は、この刑罰が執行される可能性が出てきます。ただし、例えばそれ以外の、イスラム法による統治をちゃんとやっていない国の場合、場当たりのこのような刑罰を執行することはできません。

もう一度繰り返しますが、イスラム教の、戒律の宗教という面を強調し過ぎると本質を見誤ります。本質というのは、あくまでも神に全面的に従う、全面的に身を委ねるといことです。だから、そのルールの中では自由を享受できますし、快楽を追求することも認められるという面がある。そのバランスが、イスラムという宗教を外から見た場合の本質です。

聖地への巡礼

この2年ほどは、コロナで、巡礼者の数をサウジアラビア政府が強く規制しましたが、通常は巡礼の月になりますと、何十万という人たちが一遍に巡礼に訪れます。巡礼の群衆には男女両方が混ざっています。衣装は、縫い目のない2枚の布を体にまとうだけで、これは王様だろうと、貧しい人だろうと、全て同じ衣装です。王様だからといってきらびやかな格好をすとか、そういうことはありません。その点では、先ほど言いましたように、信者や神との垂直的な関係において上下がはっきりしますけれども、人間同士の間は全く平等になるということを象徴的に見せる瞬間だだと思います。

六つのことを信じる (ムスリムの信仰箇条)

さて、イスラム教徒は6つのことを信じて、5つのことを義務として行う。これを六信五行と言います。

何を信じているか。まず当たり前ですが、神を信じている。

2番目に、神と人間との間をつないでいる存在として、天使というのは一応信じています。ただし、この天使は恐らくキリスト教からの借用です。

3番目に、使徒、神のメッセージが伝えられた人です。先ほど言いましたとおり、ムハンマドだけでなく、先行する一神教のモーセやイエスも含まれます。

それから4番目に啓典、その神のメッセージを記した書物のことです。当然のことながら、ムハンマドに下されたコーランが至高のものですけれども、それ以前の使徒に下されたもの、例えばモーセに授けられた律法、ダビデに授けられた詩篇、イエスに授けられた福音、これら全てがイスラム教徒の啓典になります。したがって、イスラム教徒は、例えばキリスト教の聖書やユダヤ教の旧約聖書に対して敵意を持っていません。

ちなみに、イスラエルとパレスチナの紛争のことを思い浮かべた方もおられるかもしれませんが、あれはイスラエルという、ある意味、世俗の国家がパレスチナの領土を奪い、パレスチナ人の自由を奪ったから紛争になっているので、ユダヤ教対イスラム教の争いではありません。

それから、5番目に来世。これは、死んですぐではなく最後の審判の後の話です。それでは死んだ後、最後の審判までの間、死んだ人間はどうしているのかというと、そこは書いてないからよく分からない。とにかく、天国（楽園）と地獄（火獄）のどちらかに行くことになる。どんな悪いことをしているイスラム教徒でも、この来世だけは信じています。

それから6番目に予定、カダルと言いますけれども、何が起きるかというのは神の定めによる。明日のことは神にしか分からない。これが因果律の否定です。

よくイスラム教徒と話していると、明日、例えば9時から会議をやる。それはインシャ・アッラーだと言うんです。このインシャ・アッラーというのは、神が望むならそうなるという意味です。普通、日本人の感覚から言ったら、9時に来いと言っているのだから9時に来いとか思わないわけですが、イスラム教徒は、神が望むなら私は9時に来ると考えます。つまり、家族が病気になるかもしれない、電車が止まるかもしれない、明日何が起きるかなんて、人間が約束するのは不遜だというのが元の意味です。

ところが、日本人をはじめとして、イスラム教徒じゃない人間から見ると、インシャ・アッラーと言われると、大体約束を破るときの常套句だろうとしか思ってい

ない。実際、そうやって使うイスラム教徒もいますが、元の意味はそうではないということをちょっと覚えておいていただきたいと思います。

五つの行い：基本の義務

5つの行いですが、一番大事なものは信仰告白です。シャハーダと言います。こんなことを言ったらイスラム教徒に怒られますけれども、これだけでもうイスラム教徒なんです。どういうことかということ、アッラー以外に神はいない。つまり一神教だ。アッラーだけが神だ。ムハンマドがアッラーの使徒だ。[la ilah illa Allah, Muhanmad al-rasul al-Allah] この文句だけは、必ず世界中どここのムスリムだろうと、全部アラビア語で唱えます。

これはもう毎日毎日、口の中でも言っていますし、コロナ禍でも唱えますし、とにかくこれを声に出して、心から唱えると、その人はイスラム教徒です。

2番目に、1日5回、メッカの方角に向かっての礼拝があります。ただし、これも5回やらなくても、2回まとめてやるとか、いろんなやり方があります。やらない人はやりません。金曜日は集団礼拝をしますけれども、それも行かない人は行かない。もちろん、行く人は多いです。

それから3番目ですが、イスラム教徒じゃない視点から見たとき、私が大事だなと思っているのはこれです。ザカートと言いますが、喜捨です。弱者を助けるために利益の一部を差し出すんです。差し出すと云って、それはもちろん神に差し出す意味なんですけど、現実には、ザカートを集める人にこれを出して、弱い立場の人にお金や物が分配される。この感覚は非常に強いんですね。

それから、4番目がサウムという齋戒、日本では普通断食と言っています。イスラム暦は陰暦ですので、毎年毎年、約2週間ずつ前倒しになっていきます。そのイスラム暦の9番目の月、これをラマダン月と言い、日中の欲望を絶ちます。普通断食と言うと、ものを食べない、飲まない話だと思われがちなんですけど、もう一つ重要な禁止事項があって、これは性行為です。もとよりイスラムの場合には、性交渉というのは正規の婚姻をしている夫婦間でないと認められませんけれども、それであっても日中は駄目だということです。

5番目がハッジ、サウジアラビアのメッカに巡礼することなんですけれども、これは一生に一度のことです。

そうすると、この5つの義務のうち、四六時中いつで

もやる方がいいのが、最初の「アッラー以外に神はいない。ムハンマドはアッラーの使徒である」と心から唱えることです。あとは、例えば大巡礼なんていうのは、実際、経済的な条件や、健康面からできない人が幾らでもいますけれども、できなかつたら駄目なイスラム教徒かということ、そんなことはない。断食もそうです。喜捨もそうで、本人が貧しいのに差し出せと言われたって出すものがないということが当然あるわけで、これもできなかったからといって駄目なイスラム教徒ということにはならない。ただし、信仰告白だけはないとイスラム教徒にはなりません。

戒律に関する注意点

皆さんは様々な省庁にお勤めですね。一生のうち、多分仕事で何らかの形でイスラム教徒と接触することが出てきますので、そのときのために幾つかの注意点を申し上げておきます。

有名なのは豚肉の禁止です。コーランでは何を食べるなど言っているかということ、まず死んだ獣の肉です。これは言うまでもありませんが、病死した肉の可能性があるので。それから血と豚肉です。お酒を除くと、食べ物の禁止規定はこれしかありません。

それから、魚の類も、全て基本的にオーケーです。野菜はもちろんオーケーです。ですから、駄目なのは、豚と血液と既に死んでいる獣の肉、それだけです。

豚肉に関して非ムスリムが知らない点

豚肉に関して、イスラム教徒じゃない人間が誤解しがちな点ですが、そもそもコーランでは、ほかに食べ物がなかったら豚を食べてもしょうがないと書いてあります。だから、無理強いされたときも食べています。ただ、言うまでもありませんが、わざわざ豚を食べさせるというのは嫌がらせですから、悪意でやっている場合には反発されます。

それから、豚肉以外の肉に関しては、キリスト教徒とユダヤ教徒が食べているものならオーケーです。イスラムの戒律どおりに食肉を処理しようとすると、頸動脈を切断して血を出す処理をしなければならないんですが、そういう肉を得られない場合には、ほかの一神教徒が食べてオーケーなものは食べていいという規定があるんですね。だから、日本にいるイスラム教徒の場合も、アメリカ産とかオーストラリア産の牛肉、あるいはブラジル産の鶏肉などについては食べる人がいます。

日本でも、完全にイスラム教徒のやり方にのっとって処理をした肉も入手はできます。でも、やっぱり値段が高くなります。私はそれで、イスラム教徒の学生さんと話したことがあるんですが、冷凍になって輸入されてくるものより、日本のほうが衛生管理が行き届いていて、しかも頸動脈切断ではありませんけれども、失神した状態ですぐに血液を出してしまいますから、ほとんど問題ないんじゃないのと言ったら、「うーん」って考え込んでいます。確かに冷凍してどういう手が加わったか分からない肉を食べるくらいなら、日本のほうが多分衛生的にいいということは分かると言っていました。それから、豚に関しては、食べたからといって、先ほどの姦通で死刑みたいな、ああいう罰則はありません。神は慈悲深いから無理なことは求めません。

イスラム教徒に対して、どうして豚を食べないのって聞く人がよくいるんですね。ところが、そんなこと彼らに説明できるわけがない。コーランに「豚は駄目」って書いてあるから駄目というだけの話です。神が決めたことに、人間は手を加えようがありません。1,400年前と違って、今はもう豚も衛生的になったからいいだろうみたいな話は通じないです。これを私たち日本人は知っておかなければいけません。

もっと大事なのは、日本人で改宗したイスラム教徒は豚が食べ物だと知っていますけれども、一般に中東やほかの世界の生まれたときからイスラム教徒の人たちには、豚が食べ物に見えていないということです。つまり、例えて言うなら、日本人に向かってどうして猫を食べないのって聞いているのと同じことになるんです。したがって、豚はどうして食べないんだとしつこく聞いてしまうというのは、それだけで、かなりインサルティングな質問になっているということを自覚しないとイケません。

ハラールとハラーム

本来は食べ物だけではないですが、ハラールとハラームという概念があります。ハラールというのは神によって許されているものです。反対語がハラームで、禁じられているものです。先ほど血液と豚肉は禁じられていると言いましたが、罰則はありません。アルコールだけは別規定で、これは罰則があります。

お酒を飲まないというのは非常によく知られた話だと思うんですが、イスラムが誕生した頃は彼らは飲んでいました。コーランの中でさえ、このお酒の禁止の規定というのは揺らぎがあって、あるところでは、お酒に

はいいところと悪いところと両方ある、しかし、悪いところのほうが多いからやめろと書いている。また、別のところでは、酒を飲んだ初期の信者が、礼拝をするときに、酔っ払ってコーランの文句を読み間違えて、これはいかんということになったとある。それから、もう一つあって、これはムハンマドの弟子たちがある豪族のところに呼ばれて宴会をやって、そこでワインを飲んだんですね。酔っ払った挙句、ラクダの顎の骨かなんかでぶん殴ってけがをさせたとかで、そこから先はもう飲むなという話です。だから罰則の規定があるんですが、豚と血液については罰則規定がない。

ちなみに血液というのも、イスラム教徒と会食する際に、牛肉を食べたとしても、血がにじむようなレアとかミディアムレアというのは、相当気持ち悪く見えています。普通は隣で食べる側も、血の滴るようなものは避けたほうがいいでしょう。彼ら自身は完全にウエルダンで火が通っていないと食べられない。

食べ物について、イスラムが非常に厳しい戒律を持っているという誤解を与えやすいですが、むしろ、基本的には全部、食べられるんだけど、豚と血液が混じっているものだけは避けてくれということです。

■ハラールビジネス

このハラールは、最近ビジネスになっていまして、詐欺と思われることがありますので、気をつける必要があります。日本でも、今年のオリンピック、パラリンピックに関連して、コロナが起きる前は、こういうハラールビジネスを盛んにやろうとしていました。ハラールビジネスというのは、ハラールを認証する団体があって、その認証マークをとって、それをお店につけるといいます。これは実際にあったケースですけれども、豚肉を出さないとか、ハラールの処理をして、認証マークをお店の外に貼っておきながら、店でビールを売っている。これは駄目ですよ。もし、ハラールという印をつけるんだったら、アルコール類を出すのをやめないとおかしいことになってしまう。

メニューの中に、これだけは豚とか血液とかを使っていますよと示したいのであれば、むしろムスリムフレンドリーぐらいにしておくべきです。ハラールとハラームというのは、イスラムでは非常に厳密な規定がありますので、これを日本人がビジネスにするというのは、かなりインチキ臭い話です。

特に国はこの問題に関しては手を出してはいけません。どうしてかという、ハラールか否か、神にしか分からないものを人間が勝手に認証している、その時点で

詐欺です。現実的には、日本の場合には、マレーシア系の団体がやっていたけれども、マレーシア自体もイスラム国家ではないのに、そもそもどうして認証できるのかという問題が起きる。

それから、マレーシアの認証よりも、うちの国のほうがもっと厳しい認証で正しいんだと、別の国が売り込んできたときに、例えば農水省がこれに対して何らかの関与をしていると、何でマレーシアがよくてうちの国は駄目なんだとか、いろんな問題に巻き込まれます。だから、これは一切、手を出しちゃいけないケースです。これはイスラム教徒にしか分からないし、イスラム教徒でも、本来、ハラールかハラームかということは神にしか分からないので、人が軽々しく認証を与えられるようなものではないということはぜひ、覚えておいてください。

それから、拡大解釈もひどいもので、ハラールの化粧品とか、ハラールの水とかいうばかばかしいものまで出てきましたが、これはほとんど詐欺ビジネスそのものです。全く成り立たないです。

慈悲深きアッラー

神というのは、今お話ししてきたように怒るときは厳しいんですけども、慈悲深い存在です。イスラムの中では「あまねく慈悲深きアッラーの御名において」というのが、公文書や教科書や新聞などで、冒頭によく使われる非常にポピュラーな言葉です。

あまねく慈悲深きアッラーの御名において

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

実際、普通の信者にとって、神というのは非常に慈悲深い存在とみなされます。我々、西欧世界のほうは、イスラムを暴力的な宗教だと思込んでいるんですけども、彼らにとってはそうではありません。

イスラムの社会的特徴

■都市的・商業的な宗教

イスラムというと、砂漠の宗教で、砂漠というのはいらないところですから、人間関係もひどくぎすぎすしているんじゃないか、そういうイメージがあります

けれども、全くの誤解です。アラビア半島の乾燥地域で生まれたことは事実ですが、都市を舞台にできた商業的な宗教で、極論すると商売人の宗教と言ってもいいです。

実際に、商取引に関する規定というのも、先ほどのイスラムの法の中に多く含まれています。始めたムハンマドが商人なので、非常に商業的なたとえ、例えば、秤をごまかすとか、寝ている間にお金が増えるなんて話はインチキだとかがあります。これは、利子を禁止することの原点に立っている考え方です。

だから、現在の金融工学で編み出されてくる様々な金融商品というのは、イスラム的にはかなり疑いの目をもって見られます。イスラム金融というのも、非常に大きな規模になってきていますけれども、ごくごく原理的なことを言えば、イスラムだってお金を何かの事業に投資することは別に何の問題もないんです。投資して当然そのリターンを得て、利益を投資した人に分配する、それは全然問題ないんです。では、なぜ利子を禁止するかというと、利子というのは何に投資しているのかが分からないからです。投資家から見て何に投資しているかが分からない状態でお金が増えたり減ったり、これは駄目だと言っています。

ですから、すごく原理的に言えば、投資した事業が失敗すれば、その損を引き受けるという前提の下でないとイスラム的な金融は成り立ちません。デリバティブのように、どこにマイナスがあってどこにプラスがあるのかわからず、ごちゃっと一緒になっている状態の金融商品というのは、かなり疑いの目で見られます。

■聖俗不可分(政教分離の発想はない)

それからイスラムは、そもそも聖俗不可分です。政教分離の発想というのはイスラム自体の中にはない。だけど、現実には、ほとんどのイスラム世界の国はある程度、政教分離をします。一番厳しい国の一つであるサウジアラビアでさえ、王様が統治をする政治の部分と、それからワッハーブ派という非常に厳しいサウジアラビアの宗教とがあり、このワッハーブ派は王様の統治には口を出さないという約束があるんです。ですから、イスラム教は聖俗不可分ですけど、サウジアラビアは聖俗分離しているということになります。今度のタリバンは、完全に宗教指導者が国のトップに来ると宣言しているので、この場合、聖俗不可分というのを地で行くことになります。

聖俗不可分は、しばしば、イスラムに対する批判によく出てきます。ただ、逆にヨーロッパを考えてみると、

聖俗分離したのは近代に入ってからで、それまでは教会の力をもって強かったですよね。教会は現世の政治にまで口を出していた。それを分けて分けて、結果的に現在は、宗教は政治に口を出してはいけないというルールにしたわけです。ヨーロッパはそうなっているんですけども、イスラムはもともと、その発想がないんです。

現実には、イスラムの国だって政治と宗教を分けているのですが、これは結局、イスラム世界の国というのは、ヨーロッパの植民地になっていたところが多いからです。そういうところが独立して国をつくったときに、ヨーロッパの国の制度をかなりのところまで取り入れていますので、見かけ上、分離するような形にしたんです。

■イスラーム共同体は一つ

政治体制が分裂しても、イスラムの共同体は一つだという理念そのものは存在し続けますので、先ほども言いましたけれども、イスラム教徒に対して戦争を仕掛けたりしますと、にわかに兄弟だという意識が強まってきます。それを欧米の世界は、この数十年にわたってかなり軽視していた。力づくで抑えられると思っていたけれども、やっぱり抑えられなかったということです。

■他の一神教徒

ほかの一神教徒を強制的に改宗させることは禁じられます。ただし、仏教徒やヒンズー教徒などの多神教徒がイスラム教徒の支配下に置かれた場合、そこから出ていくか、改宗するか、戦うかという3つが選択肢になります。これは歴史的な話で、現実には起きないですよ。ただし、その出ていくのと改宗とを拒むと、戦いになってしまう。これは極端な例ですけども、IS、イスラム国が、シリアやイラクでこれを地で行ったために非常に残虐な殺りくを行ったと非難を受けることがあります。

■聖職者は存在しない

それから、イスラムには聖職者はいません。ターバンを巻いているのはイスラム学の先生で、神の代理人になれるような聖職者は存在しませんし、ピラミッド型の教会組織もありません。

ムスリムと暴力の関係

イスラムは、もともと商売人の宗教ですから、暴力に向かないんです。しかし、この近代以降は特にそうですけれども、見捨てられたり、居場所を奪われたりした

人々の怒りの爆発というのは、やっぱり非常に大きいですね。

不公平な搾取というものに対して、根源的な怒りがあるので、オスマン帝国なんかもそうでしたけれども、イスラムの国であっても、あまりひどいことをするスルタンは廃位させられるということが起きます。

特に、現代の場合は、戦争で女性と子供という弱者の命を奪い続けると、イスラムの敵と戦うために暴力の行使をいとわない人が増加している。これは防衛的なジハードと言いますが、イスラム教徒の側も、罪のない市民をターゲットに暴力を行使しますので、テロということになり、暴力の応酬に陥ってしまいます。

また、表現の自由の下に、西欧世界は繰り返しイスラムの信仰を侮辱しています。特にフランスの場合に顕著です。今のフランスでは、神だろうと何だろうと冒瀆することを、表現の自由として認めているんです。フランスの歴史としては、当然、教会との長い戦いの末に出てくる概念ですから、理由のあることですけども、同じことをイスラム教徒に対して適用すると、特に預言者ムハンマドを冒瀆した場合、イスラム教徒の怒りというのは非常に暴力的なものになります。

特に近代、西欧は人民の主権、あるいは人権、平等、自由というようなことを言いながら、実はイスラム教徒の世界に対しては、これを認めていなかった。

植民地支配もそうですけれども、これが、西欧世界に背を向けるきっかけになったことは歴史的には否定できないことです。

暴力の実態

暴力の実態というのは、パレスチナ、ガザもそうですし、シリア内戦もそうですし、至るところに実例があふれている。特にここ20年、9.11のテロ事件の後、アメリカがアフガニスタンに侵攻した。その2年後にはイラク戦争を起こして、いずれもうまくいかなかったわけです。2010年になると、今度はアラブ世界のほうで民主化運動が起きて、独裁体制を倒そうとしますけれども、シリア、リビア、イエメンなどでは激しい内戦に陥ったまま現在に至っています。

シリア難民が現在400万人近く隣国トルコに逃れている。レバノンやヨルダンにも100万人ずつぐらいたれている。その人たちが2015年に一斉にギリシャに密航して、そこからヨーロッパ、ドイツを目指した。その年だけでシリア難民が約130万人、そこにアフガン人や、あるいはイラク人も加わって、ドイツに殺到した。その結

果ドイツでは、反難民、反移民、反イスラムというのが新たな政治勢力の中核をなすようになっていきます。

ヨーロッパでは、もう二度と難民を受け入れたくないという市民の数が増えていますので、本当に厳しい状況になっています。

新型コロナウイルス感染症と イスラム世界

清潔というのはイスラムの基本中の基本です。もともと手洗いに非常に慣れている。それから、預言者ムハンマドが、生前何を言ったかということ記録してあるハディースというものがあるんですが、その書物の中に「感染症のあるところに行くな、感染症のあるところにいるなら、そこから出るな」とあります。この感染症というのは原文ではペストのことです。基本的に世界中のイスラム教徒は、これに従わないといけません。また、トルコなど一部の地域では、高濃度のアルコールでできたコロソイルを使うのですが、これがコロナ禍で品薄になりました。ですから、アルコール消毒、手洗い、移動の制限、これらの点は、各国の保健衛生の行政が言うまでもなく、もともとイスラム教徒の世界には存在しました。

ただし、イスラム世界が感染症を防いだかという点、これは全くできていないので、イランやトルコでもかなりの感染者を出してしまいます。世代を越えて同居する傾向が強いことと、それからお酒は飲みませんが、友達と集まって大きい声でおしゃべりするのが非常に楽しみである。イスラムでは一人であるのは非常に悪いことだという感覚がありますので、どうしても人が集うんです。それから、異性間ではやりませんが、同性間での身体接触というのは一般的に濃厚ですので、会うとすぐハグをしたりします。教えには感染症対策は含まれてはいたんですけども、現実には、なかなかそれはできない。

それから、もう一つ、結婚式は人が集まってしまうので、どのイスラム世界の国もかなり規制したんです。しかし、一つ規制ができなかったのがお葬式です。葬式に集まるというのは、イスラム的に善行とされますので、このときだけは人が集まってしまう。葬式をやめろとは、さすがにどの国の政府も言えなかった。これも感染を防げなかった点です。

タリバンのようなイスラム組織への対処

最後にタリバンについて少し話します。結局、20年

にわたるアメリカとNATO軍との支配は失敗したんですよ。2019年に、当時のトランプ政権とタリバンとが交渉して米軍の撤退を決めています。最後のところがバタバタになってしまったのは、あまりにアフガン政府軍がタリバンと戦わずに投降したからです。

今回、タリバンがアフガン全土を制圧する過程の中で大規模な戦闘は起きていない。ということは、アフガン政府軍は、最初から戦う気がなかったということです。米軍の援護、特に空軍からの支援がなくなった後は、もう一挙に制圧が加速してしまっただけで、さすがにアメリカは8月15日に首都のカブールが落ちるとは思わなかったと言っていますけれども、もう時間の問題となっていたんです。

西側に協力したアフガン市民を退避させるということが話題になっていますよね。ただ私はあえて申しませんが、日本の場合、退避の話を出してしまっただけは間違いだと思っています。どうしてかという点、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリアなど、アメリカの同盟軍の場合は、軍が出ていて、しかも軍事行動をしていたんですね。軍事行動というのは、必ず関係ない一般の市民を犠牲にします。アメリカは市民を犠牲にした場合、コラテラルダメージ、付随する犠牲という言葉を使いました。しかし、殺されるアフガン市民の側から見れば決して軽視できるようなことではなかった。

日本の報道で、物すごくミスリードしている点があります。アメリカなどの援助関係者の通訳の人を退避させなきゃいけないという話が出ていました。通訳は、アメリカ軍の軍事行動に伴って、例えば一緒に行った先の村で相手を尋問したりする役割も果たしたわけですから、そりゃあ怖いに決まっています。タリバンを恐れているだけじゃなくて、一般の人たちから復讐されるんじゃないかという恐怖感がありますから、これはアメリカは退避させなきゃいけない。しかし、日本は軍事的な支援をしていなくて、民生支援しかしなかったわけですから、なぜ、アメリカやイギリスのように軍事行動を伴っていた国と同じように退避させる必要があったのかということについては、やっぱり疑問なんです。

なぜかという点、タリバンはイスラムの組織ですよ。イスラムというのは、本質的に違う文明圏との商売で成り立ってきた宗教ですので、どんな過激なイスラム組織でも、外国イコール敵という感覚はないんです。ただし、自分たちを殺した人間は敵になります。

ですから、基本的な原理を考えれば日本は敵ではないし、実際、タリバンは日本を敵視していない。そういう

中で、もちろん怖がっている人を退避させるというのは、人道的な観点ではいいと思うんですが、しかし、日本は全くそういう軍事行動を伴わない様々な分野で人材育成に貢献してきたのに、アメリカに同調してしまうと、その貢献が無駄になってしまう可能性がある。そこをもっと政府は冷静に考えるべきであったと思います。

■相手の論理を知ることが不可欠

もちろん、タリバンはイスラムの法体系を厳格に適用すると言っていますので、そうすると、原則論で言うと、問題になるのは二つあります。

一つは民主主義を認めるか。例えば選挙をやるか。タリバンは真っ向から民主主義を否定しています。だから、我々の価値観あるいは西欧の価値観とは全く接点がないんです。ただ、タリバンはなぜ民主主義を否定するのか、その相手の理屈を知らないのが問題なんですね。知らないままで、民主主義を否定するとんでもないやつだ、悪に違いないと、今、世界中がほとんど同じ態度を取っています。けれども、彼らが民主主義は駄目だと言っているのは、こういうことなんです。

これは数少ないタリバン側が出している文書から得たものですので紹介します。民主主義というのは基本的に多数決の原理です。そうすると、多数派の思いのままに政治を動かすことになって、少数派の意見は排除される。中でもタリバンが問題にしているのは、多数派が法を制定できるということなんです。法というものは、必ず法に従うことが善であって、逆らうことが悪であるという両者を含みます。ところが、タリバンはイスラム組織で、イスラムでは善悪の基準というのは神の手にしかないと考えるわけですね。なぜ、善悪の基準は神の手にあるべきで、人間の手にあってはいけないのかというと、人間は、そのときそのときで、多数派を形成して、その多数派の正義が正義になり、少数派の正義は不正義あるいは悪になる。だからこそ、善悪の基準というのは人間の手においておくと駄目なんだとタリバンは言っている。したがって、多数決の原理によって、政党ができて多数党が与党になるという、そういう選挙制度自体もタリバンは全面的に否定しています。

ですから、これからできるタリバンの政権にとっては、民主主義を尊重するかという問い自体が極めてばかげた問いになっているということを我々は認識しなければなりません。

■軍事力行使は失敗する

もう一つは、軍事力の行使は失敗するということで

す。タリバンは全体主義ではありません。全体主義というのは人がトップに来るものを指します。神権政治かと言われると、物事の善悪を神に帰してしまうという点ではそうです。では、そんなものは消滅させてしまえるか。結局、19世紀以来、大英帝国もやろうとして失敗した。ロシアも失敗した。アメリカと同盟国も失敗した。この上、さらにもう一度タリバンを倒すために軍事行動をとってもアフガニスタンが内戦になるだけです。現状でも、1日1.9ドル以下、絶対的貧困ラインより下回る人々が、アフガン政府の言い分によると9割近くいる。その状態で内戦になれば、貧困層の人たちは、相手がタリバンであれ、政府軍であれ、軍閥の軍隊であれ、給料をくれるんだったら傭兵になってしまう。そうすると、またひどい内戦状態に陥ってしまい、多くの命が奪われることになる。

■有効な対処法は、対話しかない

私は、力で服従させることができなかつた以上、一旦はタリバンの政権を認めて、その上で我々の価値観とイスラムの価値観と、どこに衝突があるのか、それを埋めるためにはどうしたらいいのかということ、新たに一種の講和条約のようなものを考えて交渉しないと、結局アフガン全体を見捨てることになりかねないと考えます。有効な対処法は対話と交渉しかない。つまり、イスラムの論理を知った上で、彼らに弾力的な運用を求められない。軍事力の行使は絶対に失敗しますし、啓蒙主義のような文化的同化圧力も失敗します。

■文化的同化圧力も失敗する

今日最初に申しましたけれども、イスラムというのは、我々とは違う土台の上でいろんな制度をつくらせているので、我々の側の土台と制度を相手方に押しつけても効かないんです。今回米軍が撤退したことによって、初めて、効かないということが、世界の中で非常に明示的に示されてしまった。

撤退後、欧米のメディアは、タリバンが女性の人権を奪おうとしていると大々的なキャンペーンを展開中ですが、もう一点、女性の人権について言うと、これも土台が違っているんです。

イスラムでは、女性は奉仕される側、男性は奉仕する側であるとタリバンは言っています。事実、イスラム社会の家庭の中では、お母さんが一番偉いんです。ところが、この考え方が恐ろしく家父長的で、奉仕する側だからこそ、女性を守らなきゃいけない、女性を守るためには女性が自立的に行動することは禁止しなきゃいけない

と過剰に言ってくるわけです。

例えば肌の露出の多い服装で出歩くことも禁止しなきゃいけない。イスラムには女性の教育を否定する考え方は全くありませんので、タリバンも高等教育まで認めています。ただし、男女別という点にこだわります。いかにも家父長的な価値観で女性を守ると言っているわけで、我々の側からすると、これは到底受け入れられないんですけども、じゃあ、おまえの考えを変えろと言っても、タリバンの言っていることというのは、原点はイスラムに立ち戻ってしまいますので、これを変えることはできない。

タリバンは女子校は認めますけれども、女子校の先生は男では駄目なので、女性の教員を養成しなきゃいけない。女性の教員を養成するために女性に高等教育の機会を与えなければいけない。日本には女子校や女子大がありますので、女性に対する高等教育の蓄積というのはかなり多いんですね。そういうところで日本は実際に協力してきたし、今後も日本に期待するところは非常に大きいんです。しかも、教育や医療についてはむしろ緊急の支援が必要です。しかし、そもそも男女一緒に学ばせなきゃ駄目だという、そこにこだわってタリバンを変えようとしても絶対変わらない。とにかくタリバンはよくないという方向で世界の国際世論が傾斜してしまうと、タリバン自身の統治能力が失われる。統治能力が失われれば、また内戦に陥るといふことの繰り返しになってしまう。

■同志社大学での対話

今、私は同志社大学に勤めていますけれども、今から9年前、同志社大学に当時タリバンと政権側とを招いて、対面で和平について話し合ってもらった会議を開きました。会場は同志社大学の礼拝堂です。

タリバンに、礼拝堂だけいいかと言うと、別に一神教だから何の問題もないと答えていました。タリバンの代表と、当時のカルザイ大統領の閣僚の一人で高等和平協議会の顧問大臣だった人が集まって対話をしたんです。もしタリバンが日本を敵だと思っているなら、こういう会議には来ない。

この会議は私が主催しました。タリバンの代表に、なぜ来てくれたのかと聞いたんです。彼が言うには、日本が政治的にアメリカの同盟国であることはもちろん知っている。しかし、日本はアフガニスタン本土で軍事行動を起こさなかった。つまり、アフガン人を殺さなかった。だから、その意味では日本は敵ではない。当時も今もタリバン側の言っていることというのは、その点では

同じなんです。だから、日本政府が今回、退避の問題で、タリバンに敵視されているとあまりに拙速に思い込んだ点は大きな問題でした。

その会議の後の懇親会は、もちろん酒は出しませんでしたけれども、京都の居酒屋でやりました。タリバンの代表とカルザイ政権の大臣をあえて近くに座らせてみたら、やっぱりしゃべるんです。

当時、こんなことが展開されるとは、世界中全く思っていなかった。会議では、各々代表がマスコミのインタビューを受けて、例えばウォールストリートジャーナルとかニューヨークタイムズとか、みんなタリバンが日本に行ったと報道した。もうヨーロッパ諸国などがアフガン支援から退きかけていた時期に、こういうことが実現した。もちろん、直接タリバンと政府側が和平について協議したわけではないですよ。しかしその時は、同席したということだけで、かなりポジティブなサインになったんです。

実際、会議では、双方勝手なことを言い合うわけですから、非常にめめました。私は、主催者として、せっかく呼んだんだから、一点ぐらい何か合意しろと最後に言いました。その結果、出てきたのは、実は、外国軍が撤退するところが和平交渉の出発点になるというものだった。この点については、政権側も認めたんです。しかし、その2年後、アシュラフ・ガニーの政権が変わったときに、ガニー大統領は米国への依存をもう一度強めてしまった。そうすると、タリバンは、外国軍の撤退という条件を反古にしたのは政府側だといって、攻勢を強めてしまった。最終的にトランプは、もうこれ以上、中東やアフガンに人やお金を出しても、何の利益にもならないから退くといい出して、タリバンとトランプ政権との交渉で撤退が決まる。ある意味、ガニー政権の頭越しに決められてしまったので、ガニーの政権としてはなすすべもなく、今回崩壊した。

とにかく信頼醸成のないところで対話はできませんし、対話のないところに和平はない。当然、私だって、イスラム教徒ではありませんから、別にタリバンの言い分を支持はしませんけれども、しかし、本当にこれ以上どうしようもない混乱に陥らせないために、我が国として何かの支援をするのであれば、相手のロジックを理解した上で相手を攻めないといけません。攻めるというのは攻撃するという意味じゃないですよ。相手を理解した上で追及していかなければ、物事は成り立たないんです。

そろそろ我々は、西欧世界のロジックだけが世界を支配できるという思い込みから脱すべきだし、皆さん

は、これから長い間国家公務員として、この国の行政を担っていかれる方々ですから、どうか、世界の中でどう生きていくかということを考えて仕事をしていただきたいなと思います。

私の話は、これで閉じさせていただきます。

質疑応答

○**研修員** 先ほど、タリバンが民主主義に否定的な考えを持っているというお話があって、非常に興味深く聞いておりました。一方で疑問に思ったのは、それではタリバンの人たちは、自分がアフガニスタンを統治する正統性を何に求めているんだろうということです。

例えば中世のヨーロッパだったら、宗教に引き付けた王権神授説があったと思うんですが、タリバンは何を理由に自分がアフガニスタンを統治する資格があると考えているのでしょうか。

○**内藤講師** タリバンの主張を聞いてみると、あくまで、イスラム法学者が統治をして、その下に行政を行う大臣たちが来るというつくりの国家になります。神によって何か授けられたという感覚ではなくて、自分たちがシャリーアに基づいて国をつくるということが国家の原理になります。ボトムアップ型です。

民主主義の否定というのは、全くそのとおりで、この体制は全く民主主義と接点がないんです。民主主義を真っ向から否定する連中とどう付き合うかということは、あまり我々修練がない。口では民主主義と言いながら中身が違うという連中なら幾らでも付き合ったことがあります。真っ向から否定してくる連中というのは、どういうロジックで、どういう意味があって、その正統性が保たれるのかということも含めて勉強しないと相手と付き合えない。これにいら立っていきなり軍事力で潰すというのをやると、結局テロ組織が飛散して、もっと暴力的な組織になるだけです。そのことを我々は、この10年間、さんざん見てきました。日本は軍事力を行使していないという理由で、そういうテロの飛散からは逃れていましたけれども、一つ間違えるとやはり、危険が迫ってきてしまうことになるんです。

ところが、タリバンは、それまでのアフガン政府と戦うときにはよかったんですけども、自分で統治するとすると、20年前に大失敗した経験しかないんです。そこが、今後現実的にうまくいくか、私は懐疑的です。タリバンといえども、末端の兵士は現金で雇われているわけですから、この資金が枯渇すると統治能力が急速に失われて、また混乱状態に戻ってしまうのではないかと思

います。

だから、今は難しい時期ですよ。アメリカは負けて出ていっちゃったわけですから、もう二度と手を突っ込みたくない。ヨーロッパはNATO軍として行った国が多いので、手は出さないが口は出すぞと言っている。そうすると、日本にここを何とかするつもりがあるならば、妥協する必要は全くないので、我々の観点からは駄目だと思うことを言った上で、タリバンと渡り合わないといけないんですね。日本大使館はやはり、もっと相手の情報を取って、どういう動きをするかということを見ておくべきでした。国際社会の中の日本なので、皆さんはぜひ、日本のどの省庁におられても、世界がどういふふう動くかということ、このイスラムというものを軸にして考えてみていただきたいと思います。

○**研修員** 先ほどイスラム法学者が国のトップに立つという話を聞いて、イランと似ているように思いました。イランは一応選挙をやっていますが、どうやって民主主義的なものとイスラム法学とを両立しているのでしょうか。

○**内藤講師** イランはシーア派で、イスラム世界の中で10%ぐらいしかいないマイノリティです。その集団を率いることができるのは宗教指導者です。今のハーメネイーがそうですね。

世俗の政治は下に任せるといやり方にしたのですが、あくまで、最終的な決定権限はハーメネイーが持っている。だから、前のロウハーニー大統領は、アメリカと協調して6か国協議に戻ろうとしていましたけれども、ハーメネイーが駄目と言うと崩れちゃうわけで、そうしてだんだん力をなくしていった。

実際に暴力的な行動についても、イランの国軍ではなくて、革命防衛隊がやっています。革命防衛隊というのは、ハーメネイーに直属の軍隊です。確かに大統領選挙をやるところは民主主義とうまく折衷させたんですが、決定権限が大統領にないという点では、まだ、宗教的な統治という一線を崩していないということになります。

かたや、サウジアラビアを見ると、あそこは民主主義は全くありません。あの国はサウド王家の持ち物です。キングダム・オブ・サウジアラビアと言っているのは、サウド王家のアラビア王国の意味なので、人民主権なんでもの、全く念頭にないんです。

ただ、ここで考えなきゃいけないのは、実は湾岸の石油産油国に対しては、アメリカはこれまで民主主義なんて一言も言ってこなかったし、圧力をかけてもないんです。豊富な石油資源を持っている国とトラブルを起こ

したくなかった。結局、アメリカは石油がある国には手をつけなくて、石油がない国を叩いてきたということ、世界中のイスラム教徒はみんな分かっているわけです。そこはやっぱり軌道修正していかないと、今後うまくいかないですね。もちろん、石油資源に全面的に依存する時代から変わってはいきますけれども、地域的な不安定の要因になりやすいということも理解しておいていただきたいと思います。

○**研修員** 最近のアフガン情勢は、私も関心を持って見ておりました。イスラム圏は、日本から距離もあり、西欧社会と比べてなじみがありません。日本で拾いやすいイスラム圏の情報も、我々が慣れ親しんでいる西欧世界のフィルターを通した情報が結構多いのかなと感じています。そういった中で、先生がふだんイスラム圏の情報を収集されるに当たって、心がけていることがあったら教えてください。また、イスラムへの理解を深めるために、お薦めの書籍や情報の収集方法があれば教えてください。

○**内藤講師** 一番簡単なのは、アルジャジーラ・イングリッシュですね。YouTubeで見ることができます。アルジャジーラはカタールの国際衛星放送局ですが、今回のアフガン情勢についても、タリバンの言い分だけを流したりはせず、女性の人権に関してこういう懸念の声がある、こういう反対の声があるということを出しています。しかし、欧米のような啓蒙してやるぞという態度ではないですね。

今回、アメリカ人を含めてアフガンからの退避にカタールがかなりコミットしたことは知られています。カタールは、湾岸にあって、個人のサーニー家という王家が持っている国ですが、あまりに国が小さいので、どちらにも寄らないでバランスを取って生き延びた国なんですよ。

一時期、サウジアラビアが制裁を科して日干しにしてやると脅したんだけど、カタール自体は天然ガスの資源があるので、何もへこたれなかった。カタールは、イスラム主義バリバリの国と、アメリカとの距離を等距離で保とうとしている国で、アルジャジーラはその国策

できているんです。結果的にアメリカ側にも寄らず、どっちかというイスラム側の意見の紹介が多いので、例えばCNNとかABCといったアメリカの放送やBBCと突き合わせてみると、何が違っているかということが非常によく分かります。しかも無料です。

アルジャジーラは、歴史的にも蓄積がありますし、お金がカタールの首長家から出ているので、カタール国内のことは一切言いません。外国のことだけは割と客観的に報道しています。英語のソースとしては、あれがベストですね。

○**研修員** ありがとうございます。

○**内藤講師** 最後にひとつ申し上げますけれども、タリバンだろうと何だろうと、別に悪魔でも鬼でもありません。とにかく会ってしゃべってみなければ話にならないんです。

私が同志社でやった会議のときに、うちの女子学生がタリバンとツーショットで写真を撮らせてくれと言ったら、タリバンが断ったんですよ。その女子学生もなかなか大したもの、「何だ、私が女だから撮らないのか」と聞いたんです。そうすると、いやいやそうじゃない。実はあちこちで写真を撮ってしまって、自分の妻にひどく怒られたので、写真は勘弁してほしいと答えている。そういう人もいます。相手を悪魔のように思ってしまうと、理解を妨げるだけなんです。

それからもう一つ。過去20年の間、アフガニスタンの政権というのは、やっぱり、あまりに腐敗していた。アメリカがつぎ込んだお金は、ざっと1日当たりに換算して日本円にすると300億円ぐらいになるんですよ。1日300億円です。それでいて、アフガン政府自身と言うように、絶対的貧困ライン以下の人が9割を占めているとしたら、これは誰がどう見たってアドミニストレーションが悪いんです。その責任を問い直すことからしなければ、復興支援はできません。

日本は緒方貞子さんがJICAの理事長だった時代から、人づくりということに非常に力を入れようとしてやってこられたわけですから、やっぱりそれは大事にして、世界にアピールすべき点だろうと思います。